The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本における主観的地位の実態と変容
Author(s)	谷岡, 謙
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72459
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　谷岡　謙　　）	
論文題名	現代日本における主観的地位の実態と変容

論文内容の要旨

本研究の目的は，現代日本における主観的地位の実態とその変容について計量的に解明することである．またその作業を通じて，主観的地位という意識が，格差社会日本に住む人びとにとってはどのような意識であり，またどのような役割を果たしうるのかを明らかにする．

第1章では序章として，なぜ現代日本において主観的地位に着目するのかを，格差社会という時代背景や主観的地位研究の歴史から説明した．主観的地位研究は，階層帰属意識研究として「総中流現象」の解明のため大きな役割を果たしたものの，格差社会となってからは「中」意識という分析課題が失われその研究の意義が失われつつあったが，近年では公衆衛生分野での活用や，主観的地位の変化から格差社会への変化を説明しようとする動きもあり，新たな研究が行われている．しかし，従来の研究方法には限界がある上，論点が整理されていないこともあり，その課題を明らかにして新たなアプローチによる主観的地位研究が必要となっていることを述べた．

第2章では，主観的地位について先行研究を整理し，「総中流現象」に対して主観的地位が「中」意識研究として果たした役割とその残された課題についてまとめた．続く第3章では，現代の主観的地位研究の論点を整理し，本研究の3つの検討課題を導出した．第1に，個人の主観的地位がどのようにして決まっているのかを明らかにする．さらに，グループによる主観的地位の特徴や規定メカニズムも併せて検討する．第2に，個人の主観的地位が変化していく様子とその要因について明らかにする．そして第3に，主観的地位の分布の無変化と階層性の高まりがなぜ起きたのかを計量的に明らかにする．以上3点から主観的地位の実態を計量的に解明することを目的とした．

第4章から第7章では，日本で行われた全国調査データを用いて，上記の検討課題を検証した．第4章では，重回帰分析を用いて，主観的地位の時点間比較を行った．その際に使用したデータは1995年と2015年のものであり，この20年間の微細な変化を捉えることを目的とした．その結果，従来の先行研究から指摘されている通り，決定係数が上昇傾向にあり，各階層変数の効果もまた上昇傾向にありことが明らかとなった．そして，近年注目されている非正規雇用や婚姻状態の効果を確認したところ，その説明力は僅かであり，主観的地位を大きく左右するものではないことが明らかとなった．さらに，主観的な生活評価である生活満足度の効果も上昇傾向にあることもわかった．

続く第5章では，同じ重回帰分析を年齢層別・学歴別に行うことにより，第4章の全体で得られた結果が，サブグループごとにはどのような変化として観察されるのかを分解することを試みた．その結果，年齢層や学歴によって決定係数や各変数の効果が大きく異なることが明らかとなった．「静かな変容」は社会全体に起きているものだとして理解されていたが，年齢や学歴といった基底的な属性グループによってその変化の程度が異なることが明らかとなった．

そして第6章では，個人の主観的地位がどのように変化しているのかを明らかにするため，パネルデータを用いて個人内効果と個人間効果の識別を試みた．その結果，従来の研究で指摘されていた個人間の差を説明する階層変数でも，個人内の変化を必ずしも説明できるわけではないことが明らかとなった．

最後に第7章では，個別の地位変数との関連を検討するのではなく，地位グループとの関連が時代によってどのように変化しているのかを多母集団潜在クラス分析によって明らかにした．その結果明らかとなったのは，分布の無変化と階層性の上昇という主観的地位の変化は，2つの要因により説明できることである．第1の要因は，客観構造の変化による地位グループサイズの変化であり，第2の要因は，地位クラスと階層帰属意識との関連の変化である．これらのグループレベルの変化が複雑に絡み合い，分布の無変化と階層性の上昇という現象は引き起こされていたのである．

結論となる第8章では，これらの分析結果に基づいて，本研究の知見と含意について総合的な考察を行った．現代日本における主観的地位は，その階層性が高まりつつもその変化は属性・地位グループごとに異なるという特徴があり，時代によってそのグループの異なる変化が起きることにより，過去の主観的地位よりも複雑な構造になっていることが明らかとなった．また，階層性の高まりにより，階層という客観的な格差が主観的地位を通じて社会構造により強い再帰的な影響を及ぼすことが示唆され，今後は主観的地位の役割がより重要になっていく可能性がある．

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　谷岡　謙　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教 授	吉川　徹
副 査	教 授	川端　亮
副 査	准教授	辻　大介

論文審査の結果の要旨

谷岡謙氏は、階層帰属意識がどのように形づくられて、何を契機に変化しているかという社会的メカニズムについて、現代日本社会における社会調査データの解析研究を展開しています。本学位申請論文では、はじめに階層研究において意識を扱うことの意義が述べられます。続いて日本における調査計量ならびに数理モデリング研究の経過と、戦後の時代的変遷の独自の視点によるレビューがなされます。

現在の視点から、「中」意識研究と社会意識論型回帰モデルによる計量社会意識論の蓄積をあらためて整理する谷岡氏の手際の良さと解釈の的確さに対しては、高い評価を与えることができます。これは、この社会意識変数を学部生時代から10年以上にわたり一筋に研究してきた谷岡氏だからこそなしえた大きな研究達成だといえます。

後半部分の計量分析では、緻密かつ慎重に議論が進められます。まず階層帰属意識の客観―主観関係をみる社会意識論型回帰モデルに従って、「静かな変容」といわれる現代日本の主要なトレンドが現在もなお進行中であることが確認されます。これは、本論文の主たる問いを構成する計量的事実の確認作業となっています。続いて、性別、生年、学歴により社会集団をブレイクダウンして、どこの層においてどのような主観的地位の形成構造があり、それが時代とともにどう変化してきたのかを、同じく社会意識論型回帰モデルを用いて確認していきます。

さらに、個票パネルデータに対するマルチレベル・ハイブリッドモデルによる解析により、個人内での主観的地位の規定要因の変化のプロセスを、個人間の差異と切り離して抽出し、マクロな社会意識の変動の基礎となるメカニズムの解明が試みられています。この分析は枠組みとしては妥当であり、時代変化の内実として繊細で多様な個人内での動きがあることが指摘されます。

最後に展開されるのは、多母集団潜在クラス分析によって、階層帰属意識の客観―主観関係の実態解明にブレイクスルーをもたらす研究です。このオリジナリティの高い研究により、1995年、2015年の現役世代の男性については、一貫的な地位をもつグループが2つ、非一貫的な地位をもつグループが2つ、計4つの潜在クラスが抽出されます。そしてその内3つの潜在クラスと階層帰属意識との関連が、この20年の間に変化していることが明らかにされています。一見すると不変に見える階層帰属意識の分布は、潜在クラスの混合分布としてみていくと繊細な変化を示します。そしてその構成比率の変化こそが「静かな変容」といわれる時代変化の本質であると谷岡氏は主張します。

本研究科の経験社会学分野は、1980年代の直井優名誉教授の研究に始まり、指導教員である吉川徹の研究に受け継がれる階層意識の計量研究の歴史をもっています。谷岡氏の約150ページの詳細で緻密な総合的研究は、その一つの集大成といえるものであり、研究のブレイクスルーの糸口を見出すことに成功したものといえます。そして、谷岡氏の学問的位置づけは、独自かつ有用なものであり、さらなる研究の継続により大きな発展を期待することができると判断します。以上により本論文は、博士（人間科学）の学位取得にふさわしいと評価することができます。